

中高ドイツ語における „mugen/kunnen + ge-Infinitiv“ について^{*)}

— „Nibelungenlied“ におけるアスペクトとモダリティの相関作用—

湯 浅 博 章

1. はじめに

動詞接頭辞 ge- は現代ドイツ語では過去分詞の指標として現れるが、古くからゲルマン語で広く用いられ、定形の動詞の現在形、過去形、さらには助動詞と結合する不定詞の接頭辞としても用いられていた。(Vgl. Krahe/Meid III: 37f., Behaghel II: 100f.) この接頭辞 ge- の意味・機能についても 19 世紀以降に数多くの文法研究やドイツ語史に関する研究の中で考察されてきており、一般的には動詞の表す動作様態 (Aktionsart) またはアスペクトを「完了相化」(Perfektivierung) する接頭辞であると考えられている。この完了相化する働きは、中高ドイツ語に見られる用例にも当てはまる。けれども、(1) のように mugen/kunnen に代表される過去現在動詞 (Präteritopräsentien) と結びつく不定詞になぜこの接頭辞が付与されることが多いのかについては、まだ十分には解明されていない。

(1) a. doch möhte iu daz wunder niemen wol gesagen, (NL 229, 2)¹⁾

(doch niemand könnte Euch wohl das Wunder beschreiben.)

b. ine mac hie heime niht gesîn. (NL 919, 4)

(Ich kann hier nicht zu Hause bleiben.)

(1a) の sagen („sagen“) は完了相 (perfektiv) の動作様態を持つ動詞に

分類される (Vgl. Streitberg 1891: 103ff.) ため、ge- を付与して完了相化する必要はないはずである。また (1b) の *sîn* („sein“) は継続相 (durativ, imperfektiv) であり、完了相化はできないはずの動詞である。(Vgl. Streitberg, ebd.: 106) こうした用法における ge- の意味・機能をめぐるこれまでの研究では動作様態・アスペクトを完了相化するという基本的な ge- の機能と語法の助動詞として機能している *mugen*, *kunnen* の表す意味 („imstande sein“, „können“) とを組み合わせて説明されることが多いが、実際にはすべての用例に接頭辞 ge- が付与される訳ではないため、十分に解明されたとは言えないのが現状である。

こうしたことから本稿では、特に „*gesîn*“ のような用法にまで拡大していた中高ドイツ語における „*mugen/kunnen* + ge-Inf.“ 構文について、その文法的機能を明らかにすることを試みたい。その一方策として、本稿では „*Nibelungenlied*“ における用例を中心に考察を進めることとする。それは、„*Nibelungenlied*“ の最終的な作者は不詳であるが、数多くのゲルマン伝説の伝承を受け継いでいて写本も多く、テキスト・クリティークも十分に行われているため、より多くの当時の人々の語感が反映されている可能性が高いと考えられるからである。また、特定の作品の用例を中心することによって、接頭辞の有無によって何が異なるのかを把握しやすくなると考えられるからでもある。以下では、アスペクトとモダリティに関するこれまでの研究で指摘されていることを振り返りながら問題点を考察し、実際に観察される用例からその問題点を解明する手掛かりを得ることにしたい。

2. アスペクトと „*mugen/kunnen* + ge-Inf.“

まず、アスペクト・動作様態 (Aktionsart) と „*mugen/kunnen* + ge-Inf.“ との関係について、これまでどのように扱われてきたのかを概観しながら問題点を確認することにしたい。今日のようなアスペクト／動作様態の区別は明確ではないが、ゴート語を中心に動作様態について詳細な研究を行った W. Streitberg (1891) でもこの構文についてはすでに言及されて

いる。Streitbergによれば、Aktionsartは大きく「完了相」(perfektiv)と「未完了相」(imperfektiv)に分けられ、接頭辞ge- (ga-)は上記のように「完了相化」を行う接頭辞であると指摘されている。(Streitberg 1891: 102f.)そして、ge- (ga-)を伴わない単純形で完了相を表す動詞にはbriggan („bringen“), finPan („erkennen“), gaumjan („bemerken“), giban („geben“), letan („verlassen“), niman („nehmen“), qiman („kommen“), qiPan („sagen“), wairPan („werden“), blandan („vermischen“), bairgan („verbergen“)を挙げている。この中には過去分詞にもge- (ga-)が用いられないbriggan, qiman, finPanだけではなく、過去分詞にge- (ga-)を伴うniman, qiPanも含まれている。また、Streitbergはこれらの動詞の表す局相は「起動相」(inchoativ)であると考えている。(Vgl. ebd.: 103ff.)そして、助動詞(特にmagan, wiljan)と結合する不定詞の問題については、助動詞の持つ意味に完了相が求められる要因があると指摘している。中高ドイツ語のmugenに相当するmaganの持つ„imstande sein“, „können“という意味が「目的への到達」(Erreichen eines Ziels)を表し、それ故に完了相を求めると考えている。(ebd.: 108)けれども、この説明に従うとmugen/kunnenという助動詞と結合する不定詞には、単純形で完了相を表す動詞は除いたとしても、他のすべての動詞の場合にge-Inf.が現れるはずであるが、実際にはそうでない。そのため、後の時代にも見られるStreitbergと同様の見解ではこの点を説明することができない。

これに対して、O. Behaghel (1924)はゲルマン語では単純形の動詞の大部分が未完了相であり、単純形で完了相を表す動詞は過去分詞にge- (gi-)を伴わないbringan, drepan, finPan, geban, kumanであるとしている。(Behaghel 1924: 97)そして、助動詞と結合するge-Inf.については「一定の目的に到達することができることを強調している」とは言えないだろうとして、Streitbergのような見解には否定的である。(Behaghel ebd.: 104)その代わりに、mugenとge-Inf.の結び付きについては「完了相の表現が可能性(Möglichkeit)の表現に近い」として、„mugen/kunnen + ge-

Inf.“ 構文が否定文に現れることが多いことから、例えば „er engesach den man“(„Er sah nicht den Mann“) という否定文は „er enmohte in sehen“(„Er konnte ihn nicht sehen“) と恐らく同じ意味を持って (gleichwertig) いて、「混交」(Kontamination) によって „er enmohte in gesehen“ という „mugen/kunnen + ge-Inf.“ 構文が出来上がっているのだろうと推測している。(ebd.) また、ge- が広範囲に用いられるようになった背景には、接頭辞を用いることによって韻律上 Hebung と Senkung を変化させることができるという特徴があるのであろうと考えている。しかしながら、「完了相の表現が可能性の表現に近い」とする根拠は示されておらず、韻律上の要因もなぜ mugen/kunnen のような特定の助動詞の場合に ge-Inf. が頻出するのかを説明することはできない。

以下に示すように、こうした Streitberg や Behaghel の „mugen/kunnen + ge-Inf.“ 構文に関する考察では実際にはすべての用例を説明することはできないが、両者に共通する完了相／未完了相の区別は今日まで概ね踏襲されている。今日では、一般的に動作様態 (Aktionsart) は「話し手の捉え方とは無関係に、客観的に与えられた行為の経過 (Handlungsverlauf) の区別」であるとされ、アスペクトは「話し手の捉え方 (Gesichtspunkt) を表し、動詞の表す出来事を限界点 (Begrenzung) を持つものとして捉えるか、限界点を持たないものと捉えるか」の違いであると考えられている。(Paul/Klein/Solms/Wegera 2007: 305) これは最も一般的な Hermann Paul の „Mittelhochdeutsche Grammatik“ の最新版の記述であるが、概ね現在のアスペクト研究で用いられている定義を踏まえたものとなっている。けれども、話法の助動詞として用いられている過去現在動詞 (kunnen, dürfen, suln, mugen, müezen) と結合する不定詞に接頭辞 ge- が広く用いられていることについてはわずかに言及しているだけで、近年の研究成果はあまり取り入れられていない。この文法書では話法の助動詞の中で未来の出来事を表す場合 (例: sol trinken / sol getrinken) を取り上げて、これらが modal にも temporal にも解釈できることを指摘し、ge-Inf. は「完了性

(Perfektivität)、具体的には起動相／始動相 (ingressiv / inchoativ) の指標となっている」と説明している。(ebd.: 267) しかしながら、ge-Inf. が temporal な用法の指標として機能しているという説明は、suln („sollen“) が müezen („müssen“) と共にしばしば時制上の未来を表す代替形として用いられることを考慮すると、妥当性が低いように思われる。それは、本稿の考察対象とする mugen/kunnen の場合には未来の事柄を表す場合でも (2) のように事柄の実現可能性についての用例が多く、ge-Inf. が temporal な指標であるとは考えにくいからである。

- (2) a. Er sach sô vil gesteines, sô wir hoeren sagen,
 hundert kanzwägene ez möhten niht getragen; (NL 92, 1-2)
 (Er sah, wie wir berichten hören, so viele Edelsteine,
 die hundert Wagen nicht hätten fassen können.)
- b. Dô sprach diu küneginne: „des enmac niht gesîn.
 swie gerne ich dicke sæhe die lieben tochter mîn,
 so ist leider mir ze verre des edelen küneges wîp. (NL 1455, 1-3)
 (Da antwortete die Königin: „Das ist nicht möglich.
 Wie gern ich auch meine liebe Tochter häufig sehen würde,
 so wohnt leider die Gemahlin eures edlen Königs zu weit weg von mir.)

(2a) は Hagen が Siegfried の逸話について語っている場面で、「荷車 100 台でも運べないであろう」というニーベルンゲン族の財宝について説明している。(2b) は Etzel の後妻となった Kriemhild から招待された母親 Uote が使者に「招待を受けるのは無理だ」と返答している場面である。こうした用例に見られる ge-Inf. が temporal な指標として用いられているのであれば、例えば (2b) と同様の意味を表す (3) のような例に ge-Inf. が用いられていないことが説明できない。

- (3) Prünhild mîn vrouwe unt alle ir magedîn
die vreunt sich der mære. unt ob daz möhte sîn,
daz si iuch noch gesæhen, daz gæbe in hôhen muot.“ (NL 753, 1-3)
(Meine Herrin Brünhild und alle ihre Mädchen
freuen sich auf Eure Zusage. Denn wenn es möglich wäre,
Euch einmal wiederzusehen,
dann versetzte sie dies in eine hohe und frohe Stimmung.)

また、上記の文法書では Streitberg 以来の伝統的な見解を踏襲して ge-Inf. が起動相／始動相を表すとしているが、(2) の getragen や gesîn が事柄の始まりを表す起動相／始動相を表しているとも考えにくい。これらは事柄（財宝が荷車で運びきれないこと／Uote 自身が娘のところへ行くこと）を話し手が思い浮かべながら、その可能性について語っている場面で用いられているため、こうした ge-Inf. の用いられ方にはやはりモダリティが連関していると考えざるを得ない。そのため、次に近年のモダリティ研究の成果から ge-Inf. の問題を考察することにしたい。

3. モダリティと „mugen/kunnen + ge-Inf.“

モダリティとアスペクト／動作様態との関連については、過去 30 年間ほどの間に古高ドイツ語や中高ドイツ語の現象についても研究が行われるようになってきた。これまでのモダリティ研究の中では、モダリティは一般的に話し手の推量を表す「エピステミック・モダリティ」と話し手の義務や許可に関する判断を表す「デオンティック（拘束）・モダリティ」に大別されるが、命題内容の確からしさに対する「発話時点における話し手の心的態度」という狭義の定義のみを「エピステミック」とするのか、可能性を含めて考えるのかのように、何をどのようなモダリティと判断するのかは研究者によって異なるのが実情である。(Vgl. 山田 1990: 1-24) „mugen/kunnen + ge-Inf.“ 構文についても、こうした文脈の中で様々に考察されて

いる。Abraham (1991, 1995) や Leiss (2000a) 以降に一般的に受け入れられているのは、未完了アスペクトを表す構文 („Modalverben + imperfektive Infinitive“) ではエピステミックな解釈が優勢的であり、完了アスペクトを表す構文 („Modalverben + perfektive Infinitive“) ではデオンティック・モダリティの解釈が優勢的となるという定式化である。(Vgl. Heindl 2009: 127ff.) また Heindl (2009) によれば、否定文ではアスペクト言語であるスラヴ諸語と同様に逆転 (鏡像) 現象が起り、未完了アスペクトを表す構文ではデオンティック・モダリティが優勢であり、完了アスペクトを表す構文ではエピステミック・モダリティが優勢となるという。(Heindl, ebd.: 130ff.)

しかし、やはり何をエピステミック・モダリティとするか、デオンティック・モダリティとするかについては一致している訳ではない。概ね共通している「(命題内容の確からしさに対する) 話し手の発話時点における心的態度」という基準に合致する場合をエピステミック・モダリティとし、拘束モダリティの場合をデオンティック・モダリティと考えるとしても、すでに述べたような命題内容の生起に関する可能性を表す表現をどちらに判定するのは明確ではない。例えば、Diewald (2009) の挙げている (4) の例では (4a) ~ (4c) の3通りの解釈が可能であるとされる。

(4) Man mac si morgen mehelen einem andern man. (NL 1928, 1)

a. Enger Skopus, nichtdeiktisch (lexikalisch)

„Man hat die Fähigkeit/Möglichkeit, sie morgen einem anderen Mann zu vermählen.“

b. Weiter Skopus, nichtdeiktisch (objektiv epistemisch)

„Es ist möglich/es besteht die Möglichkeit, dass man sie morgen einem anderen Mann vermählt.“

c. Weiter Skopus, deiktisch (subjektiv epistemisch)

„Vielleicht vermählt man sie morgen einem anderen Mann.“

(Diewald 2009: 104)

この例については一般的にデオンティック・モダリティに分類される「主語の能力」に関する話し手の判断 (=4a) と並んでエピステミック・モダリティと分類される (4c) の解釈も可能であるとされるが、(5) に示すように文脈から考えると si の指す briute („Braut“) を「他の男と婚約させるかもしれない」という解釈が適切であり、実際にこの文が表している意味はデオンティック・モダリティにもエピステミック・モダリティにも該当しないことになる。

- (5) Dô sluoc er Blœdefîne einen swinden swertes slac,
daz im daz houbet schiere vor den fûezen gelac.
„daz sî dîn morgengâbe“, sprach Dancwart der degen,
„zuo Nuodunges briute, der du mit minnen woldest pflegen.
Man mac si morgen mehelen einem andern man.
wil er die brûtmiete, dem wirt alsam getân.“
ein vil getriuwer Hiune het im daz geseit,
daz im diu kûneginne riet sô grœzlfichiu leit. (NL 1927, 1-4, 1928, 1-4)
(Er versetzte Blödel einen schnellen Schwerschlag,
so daß ihm der Kopf sogleich vor den Füßen lag.
„Das soll deine Morgengabe sein“, sagte Dankwart, der Ritter,
„für Nudungs Braut, der du deine Liebe schenken wolltest.
Man kann sie schon morgen einem anderen Mann vermählen.
Will der sich die gleiche Brautgabe verdienen, dann wird es ihm ebenso
ergehen. “ Ein getreuer Hunne hatte ihm gesagt,
daß die Königin sie zu so großem Leid angestachelt hatte.)

この例が示すように、語法の助動詞を用いた構文がいずれのモダリティの意味で用いられているのかを単一文で判断することは難しく、文脈の情報は欠かすことができない。また、„mugen/kunnen + ge-Inf.“ 構文における

mugen/kunnen の多くは「能力」もしくは「可能性」の意味を表していると考えられるため、エピステミック・モダリティかデオンティック・モダリティかという分類は有効とは言えない。そのため、話法の助動詞を用いたエピステミック・モダリティに関する歴史的な研究で考察対象とされているのは、完了不定詞が用いられた (6) のような例となっている。(Vgl. Leiss 2009: 6-13, Diewald 2009: 114-118)

(6) a. (ôwê daz sô vruo erstarp)

von Veldecke der wîse man!

Der kunde se baz gelobet hân. (Pz 8, 404, 28-30)²⁾

(Diewald 2009: 115)

(Schade, daß der kunstreiche Herr von Veldecke so früh verstorben ist! Er hätte sie besser als ich zu loben bewußt.)

b. Dô sprach aber Kriemhilt: „ine wils niht wesen diep.

du möhtes wol gedaget hân. und wære dir êre liep.

ich erziugez mit dem gürtel, den ich hie umbe hân,

daz ich niht enliuge: jâ wart mîn Sîfrit dîn man.“ (NL 849, 1-4)

(Da sagte Kriemhild erneut: „Ich will nicht als Dieb beschuldigt werden.

Du hättest besser geschweigen, wenn dir dein Ansehen lieb gewesen wære.

Ich bezeuge auch mit dem Gürtel, den ich hier trage,

daß ich nicht lüge. Ja, mein Siegfried wurde dein Mann.“)

(6b) は Kriemhild と Brünhild が口論している場面で、Kriemhild の身に付けていた指環を Brünhild がそれは自分の盗まれた指環だと主張し、誰に盗まれたのかがようやく分かったと Kriemhild を非難したことに対する Kriemhild の発言である。この Brünhild の非難に対して「それは言わない

方が良かったでしょう」という Kriemhild の心的態度を表すために mugen の接続法過去形に完了不定詞が用いられている。ここでの接続法は非現実話法であり、過去の事柄に対する仮定を表している。そのために不定詞には完了不定詞が用いられていて、möhte はエピステミック・モダリティを表していると言うことができる。こうした完了不定詞と ge-Inf. が同一の機能を果たしていると考えられる場合もあるが、必ずしもそうとは言い切れない。例えば、(6b) の場面の少し前で口論を始めるきっかけとなった場面に ge-Inf. の例が出て来るが、過去の事柄に対する発話時点での心的態度を表しているとは言えない。

(7) Ze samne si dô kômen vor dem münster wît.

ez tet diu hûsvrouwe durch einen grôzen nît,

si hiez vil übellîche Kriemhilde stille stân:

„jâ sol vor küniges wîbe nimmer eigen diu gegân.“

Dô sprach diu schoene Kriemhilt (zornec was ir muot) :

„kundestu nôch geswîgen, daz wære dir guot.

du hâst geschendet selbe den dînen schoenen lîp:

wie möhte mannes kebse werden immer küniges wîp?“

(NL 838, 1-4, 839, 1-4)

(Die beiden Königinnen trafen vor dem weiträumigen Münster miteinander. Die Landesherrin handelte aus großem Haß und befahl Kriemhild in scharfem Ton, stehenzubleiben:

„Ja, vor der Gemahlin des Königs darf die Frau eines Leibeigenen nicht den Vortritt haben.“

Da sagte die schöne Kriemhild voll Zorn:

„Hättest du nur schweigen können, wäre das gut für dich gewesen.

So aber hast du dich selbst entehrt. Wie hätte denn jemals die Geliebte eines Lehnsmanne die Frau eines Königs

werden können?“)

翻訳では接続法の完了形が用いられているが、これは Brünhild の発言に立腹した Kriemhild が瞬間的に言い返している場面であり、過去の事柄に対する発話時点での心的態度を表しているとは言い難い。ここでは Brünhild の命令に対して「(そんなことを言わずに) 黙っていることができれば、あなたにとってはその方が良いでしょう。」と Kriemhild が話しているのであり、非現実話法で用いられた kunde は眼前の出来事に対する仮定の中での「能力」もしくは「可能性」を表していると考えられる。従って、„mugen/kunnen + ge-Inf.“ 構文の分析にはエピステミック・モダリティ／デオンティック・モダリティという区別よりも上記の Diewald (2009) では „lexikalisch“ / „objektiv epistemisch“ と呼ばれ、Heindl (2009) では „internal possibility“ / „external possibility“ と区別されている「能力」 („Fähigkeit“) を表す場合と「可能性」 („Möglichkeit“) との区別の方が有効であると言えよう。(Vgl. Heindl 2009: 148-154) また、(7) の kunde のように助動詞の語彙的意味としては「能力」を表しながら接続法を用いることによって話し手の推量を表し、„kunde + geswîgen“ という組み合わせで「可能性」の文意を表す構文となることもあるため、話し手がどのような心的態度を表しているかという観点から ge-Inf. の果たしている役割を検討する必要がある。この観点から、次に „mugen/kunnen + ge-Inf.“ 構文の意味・機能を再検討することにした。

4. „mugen/kunnen + ge-Inf.“ の文法的機能

4. 1. 完了アスペクト (Perfektiv) の場合

これまでに見てきたように、mugen/kunnen と結び付く不定詞に ge-Inf. が現れるのは動詞の動作様態が本来完了相のものの場合も未完了相の場合もあり、平叙文でも否定文でも現れる。また、モダリティの面から考えると、助動詞が「能力」 („Fähigkeit“) を表す場合も「可能性」 („Möglichkeit“)

を表す場合もある。„Nibelungenlied“ に現れる mügen/kunnen のすべての用例を見てみると、用例数の多寡はあるにせよ、この状況は表 1 が示すように ge-Inf. の場合だけでなく、ge- を伴わない不定詞の場合も同様である。³⁾

表 1 „Nibelungenlied“ における mügen/kunnen と結合する不定詞の分布

	Perfektiv			Imperfektiv		
	平叙文	否定文	総数	平叙文	否定文	総数
ge-Infinitiv	38 (45.8%)	45 (54.2%)	83	12 (34.3%)	23 (65.7%)	35
Infinitiv ohne „ge-“	150 (75.4%)	49 (24.6%)	199	114 (87.0%)	17 (13.0%)	131

そうすると、„mügen/kunnen + ge-Inf.“ という構文が表している意味・機能はどのようなものと捉えれば良いのであろうか。これを明らかにするために、接頭辞 ge- を伴う用法でも伴わない用法でも現れる動詞の用例を検討することにした。

まず、本来完了相を表し、接頭辞 ge- を付与する必要のないはずの動詞が用いられた構文を比べてみることにする。„Nibelungenlied“ の中でこの条件に当てはまる動詞には、sagen („sagen“), jehen („sagen“), geben („geben“) が挙げられる。(sagen: 8 例 / gesagen: 16 例、jehen: 3 例 / gejehen: 2 例、geben: 3 例 / gegeben: 3 例) これらの動詞は単純形で完了相を表すため、mügen/kunnen と結合した構文の aspekto も限界点を含む完了 aspekto (Perfektiv) を表すと考えられるが、完了 aspekto はさらに出来事の「開始」(Beginn; Inchoativ) を表すのか「完結」(Abschluss; Resultativ) を表すのかに分類される。(Vgl. Paul/Klein/Solms/Wegera aa.O.: 305) これに従って sagen の用例を見てみると、単純形の場合は基本的に「起動相 / 始動相」(Ingressiv/Inchoativ) を表すのか「結果相」(Resultativ) を表すのかの判断が難しい (もしくは明確に区別できない) 場合が多い。これに対して、gesagen の場合は「言い切ってしまう」「口に出してしまう」という出来事の「完結」を表す「結果相」(Resultativ) を表していると考えら

れる。(8a)の単純形の例では「なぜあなたはそれをジークフリートに話すことができない(話さない)のか?」と Hagen が Gunther に問いかけているが、「話すことを始めることができない」のか「話してしまう」ことができないのかは明確ではない。それに対して、ge-Inf. の(8b)は「すべての人に心の内に秘めた苦悩を話すことはできない」と Gunther が Siegfried に語っている場面であり、話し手である Gunther は「誰にでも心の内を明かしてしまうことはできない」という意味でこの発話を行っている。そのため、Gunther は sagen という行為が実現した場面を想定していて、この文は Inchoativ ではなく Resultativ になっていると考えられる。

(8) a. Dô sprach von Tronege Hagene: „daz endunket mich niht guot,

Liudegast und Liudegêr die tragent übermuot.

wir mugen uns niht besenden in sô kurzen tagen.“

sô sprach der küene recke, „wan muget irz Sîvrîde sagen?“

(NL 151, 1-4)

(Da sagte Hagen von Tronje: „Das halte ich nicht für gut.

Liudegast und Liudeger sind überheblich.

Wir können in so kurzer Zeit unsere Streitmacht nicht aufbieten.“

Und der kühne Krieger fügte hinzu: „Warum könnt Ihr nicht mit Siegfried darüber sprechen?“)

b. „Jane mag ich allen liuten die swære niht gesagen,

die ich muoz tougenlîche in mîme herzen tragen.

man sol stæten vriwenden klagen herzen nôt.“

diu Sîfrîdes varwe wart dô bleich unde rôt. (NL 155, 1-4)

(„Ja, ich kann nicht zu allen Leuten über die schwere Sorge sprechen, die ich verborgen im Herzen tragen muß.

Man soll nur erprobten Freunden eine solche Not anvertrauen.“

Siegfried wurde darauf blaß und rot.)

こうした ge- Inf. が「結果相」(Resultativ) の完了アスペクトを表すという現象は、(9a) のように mügen/kunnen が直説法 (現在形) で「能力」 („Fähigkeit“) を表す場合にも (9b) のように「可能性」 („Möglichkeit“) を表すと考えられる場合にも共通している。また、接続法を用いて「可能性」 („Möglichkeit“) を表している (9c) にも共通している。

(9) a. Ouch erkenne ich Hagenen von sînen jungen tagen;

des mac man von dem recken lîhte mir gesagen. (NL 1796, 1-2)

(Auch kenne ich Hagen seit seiner Jugend.

deshalb braucht man mir von dem Mann nicht viel zu berichten.)

b. Ir magede unt ir vrouwen hiez si dô sâ zehant

suochen guotiu kleider, die besten die man vant,

die ir ingesinde vor gesten solden tragen.

daz tâten si doch gerne, daz mac man lîhte gesagen. (NL 785, 1-4)

(Sie ließ sofort ihre Mädchen und Damen gute Kleider hervorsuchen. Die besten, die man fand, sollte ihr Hofstaat zu Ehren der Gäste anlegen. Diesen Auftrag erfüllten sie recht gern – so kann man ohne Übertreibung sagen.)

c. „Du sihest mich wol gesunden: mîn wât ist bluotes naz.

von ander manne wunden ist mir geschehen daz,

der ich alsô manegen hiute hân erslagen.

ob ich des swern solde, ine kund iz nimmer gesagen.“

(NL 1956, 1-4)

(„Du siehst mich wohlbehalten; meine Kleidung ist bloß naß vom

Blut. Das kommt aber aus den Wunden anderer Männer,

von denen ich heute so viele erschlagen habe, daß ich

– wenn ich schwören müßte – ihre Zahl nicht nennen könnte.)

上記の sagen と同じく現代語の „sagen“ の意味で用いられる jehen の用例でも、同様に ge-Inf. を用いた構文は「結果相」のアスペクトを表している。(10a) の話し手である Kriemhild は「今ならそう言えるでしょう」と話しているが、「言い始める」という「開始」を想定しているとも「言ってしまう」と行為の「完結」した場面を想定しているとも解釈できるのに対して、(10b) の方は話し手が「(十分に) 贖われた」と言える状態を思い浮かべていることを表している。さらに、(11) の geben („geben“) を用いた用例では、単純形の文も ge-Inf. を用いた文もどちらも「結果相」のアスペクトを表している。

(10) a. „Wær' iu dar umbe leide, so'n wær es niht geschehen.

ir hetet mîn vergezzen, des mag ich nu wol jehen.

da ich dâ wart gescheiden unt mîn lieber man.

daz wolde got“, sprach Kriemhilt, „wær' iz mir selber getân.“

(NL 1042, 1-4)

(Wenn Euch dies wirklich zu Herzen ginge, dann wäre es nicht geschehen. Ihr habt damals nicht an mich gedacht (das kann ich jetzt wohl sagen), als ich mein lieber Mann durch den Mord getrennt worden sind. Wollte Gott“, sagte Kriemhild, „es wäre mir selber geschehen!“)

b. Gunther, künece edele, durch die zühte dîn

ergetze mich der leide, die mir von dir sint geschehen,

und süene iz, ritter küene, daz ich des künne dir gejehen.

(NL 2336, 2-4)

(Gunther, edler König, bei deiner höfischen Erziehung entschädige mich für alles Leid, das mir von dir zugefügt worden ist, und sühne es so, tapferer Ritter, daß ich davon Genugtuung erfahre.)

(11) a. Von des hoves krefte und von ir wîten kraft,
von ir vil hôhen werdekeit und von ir ritterschaft,
der die herren pflâgen mit vrôuden al ir leben,
des enkunde iu ze wâre niemen gar ein ende geben. (NL 12, 1-4)
(Von der bedeutsamen Macht dieses Hofes, der weiten Wertschätzung
seiner Bewohner, ihrer ausgeprägten Würde und Ritterlichkeit,
das heißt von all dem, was diese Herren sich lebenslang in froher
Geselligkeit als Ziel vorgenommen hatten, könnte euch bestimmt
niemand die ganze Wahrheit berichten.)

b. Gêrnôt und Gîselher die sprâchen: „swester mîn,
nu troeste dich nâch tôde, als iz doch muoz sîn.
wir wellen dichs ergetzen, die wîle wir geleben.“
done kunde ir trôst deheinen zer werlde niemen gegeben.
(NL 1049, 1-4)

(Gernot und Giselher sagten: „Liebe Schwester,
beruhige dich nach diesem Todesfall, der nun einmal nicht zu
ändern ist. Wir wollen dir dabei helfen, solange wir leben.“
Aber ihr könnte kein Mensch auf der Welt auch nur irgendeinen
Trost spenden.)

このように、本来完了相を表す動詞であっても、単純形を用いた構文では「起動相／始動相」のアスペクトを話し手が想定しているのか「結果相」のアスペクトを想定しているのかが明確でないのに対して、ge-Inf. を用いた構文では「結果相」のアスペクトを表すことが明確になっている。

さらに、上記のような単純形で完了相を表す動詞ではなく、完了相を表す場合も、「状態」 („Zustand“) を表す「継続相」 (Durativ) や「反復相」 (Iterativ) によって未完了相に分類される場合もある動詞の構文でも、この ge-Inf. の特徴は共通している。(12a) の sehen の単純形を用いた文は「起

動相／始動相」または「結果相」と解することも可能であり、Hagen が目の前の状況を指して、聞き手である Vogt に対して「見れば分かるだろう」という意味で発話している「継続相」を表していると考えられることも可能であるが、(12b) の *gesehen* を用いた文は使者が Kriemhild の親族と会うという出来事が実現した場合を Kriemhild が想定していることを表している。

- (12) a. „Leide“, so sprach Hagene, „mac dir wol hie geschehen,
voget von dem Rîne. nu maht du selbe sehen:
daz wazzer ist engozzen, vil starc ist im sîn fluot.
jâ wæne wir hie verliesen noch hiute manigen helt guot.“
(NL 1528, 1-4)

(„Unangenehmes“, so sagte Hagen, „kann dir, Vogt vom Rhein,
hier vielleicht zustoßen. Du kannst ja selbst sehen:
das Wasser steht hoch, und reißend ist die Strömung. Ich fürchte,
wir verlieren hier noch eine Reihe unserer guten Helden.“)

- b. Unde swaz ir mîner vriunde immer muget gesehen
ze Wormez bî dem Rîne, den sult ir niht verjehen,
daz ir noch ie gesæhet betrüebet mînen muot.
unt saget mînen dienst den helden küene unde guot.
(NL 1415, 1-4)

(Keinem, den ihr von meinen Verwandten in Worms am Rhein
trefft, sollt ir sagen, ihr hättet mich jemals traurig gesehen.
Und richtet den mutigen und trefflichen Helden meine Grüße aus.)

(13) の例はニーベルンゲン族の財宝について述べた同様の文になっているが、(13b) の *getragen* を用いた文は「100 台の荷車に積んでも積み切れない」状況を語り手が想定していることを示していて、やはり「結果相」の完了アスペクトを表していると考えられる。

- (13) a. Si hete noch des goldes von Nibelunge lant
 (si wând' ez zen Hiunen teilen solde ir hant),
 daz ez wol hundert mære ninder kunden tragen.
 diu mære hörte Hagene dô von Kriemhilde sagen. (NL 1271, 1-4)
 (Sie besaß noch so viel Gold aus dem Nibelungenland,
 daß es wohl einhundert Lasttiere nicht hätten tragen können.
 Im Hunnenland wollte sie es verschenken.
 Diese Pläne Kriemhilds erfuhr Hagen.)
- b. Er sach sô vil gesteines, sô wir hœren sagen,
hundert kanzwägene ez möhten niht getragen;
 noch mê des rôten goldes von Nibelunge lant.
 daz sold' in allez teilen des küenen Sîvrîdes hant. (NL 92, 1-4)
 (Er sah, wie wir berichten hören, so viele Edelsteine,
die hundert Wagen nicht hätten fassen können,
 außerdem noch mehr rotes Gold aus dem Land der Nibelungen.
 Und das alles sollte der tapfere Siegfried für sie aufteilen!)

このように、„mugen/kunnen + ge-Inf.“ 構文はアスペクトから考えると「結果相」の完了アスペクトを表していて、接頭辞 ge- を用いた不定詞は話し手（語り手）が当該の出来事が生じた場面を想定していることを示す指標として機能していると言うことができよう。⁴⁾

4. 2. 未完了アスペクト (Imperfektiv) の場合

次に、本来は「継続相」を表す動詞であり、助動詞構文でも未完了アスペクトを表すと考えられる動詞が用いられた用例を検討することにしたい。すでに述べたように、これらには本来接頭辞 ge- は用いられないはずであるが、„Nibelungenlied“ には sîn (wesen), hân (haben), leben の用例が見られる。(sîn: 32 例／gesîn: 30 例, wesen: 15 例／gewesen: 2 例, hân (haben): 22

例／gehân (gehaben) : 3 例, leben: 7 例／geleben: 1 例) これらの動詞は本来「継続相」であり、その表す意味に「限界点」は含意されていない。これまでに見てきたように、話法の助動詞と結合した ge-Inf. 形は「限界点」を含意した「結果相」の完了アスペクトを表していた。そうすると、本来「継続相」を表す動詞の場合も ge-Inf. 形を用いた構文は何らかの「限界点」を含むのであろうか。

この点を明らかにするために、上記の動詞が用いられた用例の表す意味を単純形の場合と比較検討してみると、ge-Inf. が用いられた用例も基本的には「状態」を表し、未完了アスペクトを表していると考えられる。しかし、単純形の場合と異なるのは、ge-Inf. を用いた用例では何らかの出来事が生起することが前提となっていると考えられる点である。(14a) では Etzel の家臣たちが Kriemhild に êre を示したことが前提となっていて、それを Kriemhild が享受している様子を当該の文が示している。また、(14b) では男性属格の人称代名詞 sîn の指している der recke が殺されたことが、(14c) では Hagen が自らライン河に沈めた財宝について「いつか活用できるだろう」と考えていることが前提となっている。このように、「継続相」の動詞が用いられた „mugen/kunnen + ge-Inf.“ 構文では、ge-Inf. は文脈上与えられる前提となる出来事が生起した（もしくは話し手が生起した状況を想定している）ことを示していると考えられることができる。

(14) a. Ez entæete danne Kriemhilt, diu alsô kunde geben:

si mohte nâch ir leide daz liep vil wol geleben,

daz ir ouch jâhen êre die Etzelen man,

der si sît grôzen vollen bî den helden gewan. (NL 1333, 1-4)

(es sei denn, Kriemhild trâte ihre würdige Nachfolge an,

die ebenfalls sehr großzügig sein konnte. Sie hätte das Recht,

nach all ihrem Leid die Zuneigung zu erfahren, die ihr die

Gefolgsleute Etzels als Ehrerbietung zeigten, von der sie später

reichlich bei den Heiden gewann.)

- b. „Wie lange suln wir vlêgen?“ sprach Wolfhart der degen.
„sît unser trôst der beste von iu ist tôt gelegen,
und wir sîn leider mêre mugen niht gehaben,
lât in uns tragen hinnen, daz wir den recken begraben.“
(NL 2265, 1-4)

(„Wie lange sollen wir noch bitten?“ fragte Wolfhart, der Ritter.
„Da unser bester Mann von euch erschlagen worden ist
und wir ihn zu unserem Kummer nicht mehr haben können,
so laßt uns ihn wegtragen, damit wir den Krieger begraben.“)

- c. Ê daz der künic rîche wære wider komen,
die wîle hete Hagene den schaz vil gar genommen.
er sanct' in dâ ze Lôche allen in den Rîn.
er wând', er sold' in niezen: des enkunde niht gesîn. (NL 1137, 1-4)
(Ehe der mächtige König wieder zurückgekommen war,
hatte Hagen in der Zwischenzeit den gesamten Schatz an sich
genommen und bei Lochheim in den Rhein versenkt.
Er hoffte, davon später Nutzen zu haben – das aber konnte nicht
sein.)

モダリティの観点からこれらの用例を見直すと、話法の助動詞が「能力」を表すと考えられる例 (14a) と「可能性」を表す例 (14b, 14c) が混在している。表2に示すように、前節で考察した完了アスペクトを表す構文でも同様に「能力」を表す例と「可能性」を表す例、さらにどちらにも解釈できる例が混在している。それは、Heindle (2009) も指摘しているように、助動詞が語彙的意味としては「(主語の) 能力」についての判断を示しながら、文意としてはその事柄に対する話し手の捉え方 (Vermutung, Einschätzung 等) を表している例も少なくないからである。⁵⁾ (Vgl. Heindl a.a.O.: 151)

表2 „mugen/kunnen + ge-Inf.“ 構文におけるアスペクトとモダリティの分布 (用例数)

	Fähigkeit		Möglichkeit		Fähigkeit/Möglichkeit	
Perfektiv	54	平叙文: 21 (38.9%)	21	平叙文: 14 (66.7%)	8	平叙文: 3 (37.5%)
		否定文: 33 (61.1%)		否定文: 7 (33.3%)		否定文: 5 (62.5%)
Imperfektiv	9	平叙文: 1 (1.1%)	24	平叙文: 11 (45.8%)	2	平叙文: 0 (00.0%)
		否定文: 8 (8.9%)		否定文: 13 (54.2%)		否定文: 2 (100.0%)

また、未完了アスペクトを表す構文では、いずれの場合も否定文の方が多い。⁶⁾

このように、完了アスペクトを表す構文でも未完了アスペクトを表す構文でも、話法の助動詞 mugen/kunnen は「能力」を表す意味でも「可能性」を表す意味でも現れ得るが、(13b) や (14a) のように「能力」を表す文でも接続法を用いることによって話し手が当該の事柄に対する自らの捉え方・心的態度を表す場合がある。これに該当するのは、ge- を伴う場合も伴わない場合もある動詞を用いた用例の中では、完了アスペクトを表す構文が9例、未完了アスペクトを表す構文が2例である。これらを加味して ge- を伴う場合と伴わない場合に共通して現れる動詞を用いた用例で比べると、事柄の実現「可能性」について話し手（語り手）が何らかの方法で心的態度を表している場合は完了アスペクトを表す構文では39例中21例で53.8%、未完了アスペクトを表す構文では34例中26例で76.5%である。この結果を踏まえると、未完了アスペクトを表す構文の場合に顕著に現れているように、モダリティの観点から見れば „mugen/kunnen + ge-Inf.“ 構文は基本的に「話し手が何らかの出来事が生じた場面を想定し、その事柄に対して何らかの心的態度を表す」という機能を果たしていると言うことができよう。そのための指標として接頭辞 ge- が用いられていると考えられ、その特徴が (15a) の gehân や (15b), (15c) のように類出する gesîn (gewesen) に代表される未完了アスペクトを表す構文では顕著に表れているのである。⁷⁾

(15) a. Der ander der gesellen der ist sô lobelîch.

ob er gewalt des hête wol wær' er ein künic rîch
ob wîten fürsten landen, und maht' er diu gehân.
man siht in bî den anderen sô rehte hêrlîche stân. (NL 412, 1-4)
(Der zweite von den Gefährten ist ebenfalls so bemerkenswert,
daß er, wenn er die entsprechende Stellung innehätte, ein
mächtiger König über weite fürstliche Ländereien sein könnte, wie
gesagt, das wäre möglich.

(Man sieht ihn dort so würdig zusammen mit den anderen stehen.)

b. „Owê liebes herren“, sprach meister Hildebrant,

„der hie lît erstorben von Volkêres hant.

nu sol der videlære langer niht genesen.“

Hildebrant der küene wie kunde er grimmer gewesen?

(NL 2286, 1-4)

(„O weh des lieben Herrn“, sagte Meister Hildebrand,

„der hier von Volkers Hand erschlagen liegt.

Nun wird der Fiedler nicht länger mehr am Leben bleiben.“

Wie hätte der tapferen Hildebrand grimmiger sein können?)

c. Dô sprach diu küneginne: „des enmac niht gesîn.

swie gerne ich dicke sæhe die lieben tohter mîn,

so ist leider mir ze verre des edelen küneges wîp.

nu si immer sælic ir und Etzelen lîp. (NL 1455, 1-4)

(Da antwortete die Königin: „Das ist nicht möglich.

Wie gern ich auch meine liebe Tochter häufig sehen würde,

so wohnt leider die Gemahlin eures edlen Königs zu weit weg von

mir. Ihr und Etzel möge es immer gutgehen.)

5. 終わりに

本稿では、中高ドイツ語においてなぜ話法の助動詞を用いた構文に接頭辞

ge- を用いた不定詞が現れることが多いのかを明らかにするために、特に頻出する „mugen/kunnen + ge-Inf.“ 構文を取り上げて、その文法的機能について考察してきた。従来の研究で示されてきた特徴付けは、アスペクトの観点からの場合もモダリティの観点からの場合も、必ずしも ge-Inf. を用いた構文のみに該当する訳ではないため、本稿では接頭辞 ge- を伴う用法と伴わない用法の両方で用いられる動詞の用例を比較検討し、„mugen/kunnen + ge-Inf.“ 構文がどのような文法的機能を果たしているか、接頭辞 ge- がどのような構文的機能を担っているかを明らかにすることを試みた。その結果として、„mugen/kunnen + ge-Inf.“ 構文は基本的に「話し手が何らかの出来事が生じた場面を想定し、その事柄の実現可能性に対する心的態度を表す」という機能を果たしていること、また接頭辞 ge- はそのことを示すための指標として機能していることを示した。これは、「完了相化」を表すという機能を担っている接頭辞 ge- が助動詞構文の中では話し手の心的態度を表す指標として新たな機能を担うようになってきていることを示している。こうした機能を担うようになったために、中高ドイツ語では話し手（語り手）が自らの様々な心的態度や想定している内容を表し分ける表現手段として、他の助動詞を用いた構文や未完了相アスペクトを表す動詞を用いた構文にも拡大して接頭辞 ge- を用いるようになったのであろう。これらの点については、別の機会に改めて検証することにしたい。

[注]

- 1) 本稿は 2022 年 3 月 8 日に逝去された京都大学名誉教授の故西本美彦先生に捧げた。西本先生には研究会活動を通して 30 年以上にわたり、公私ともに多大なるご指導をいただいた。特に、10 年以上にわたってアスペクトやモダリティ、文法カテゴリーをめぐる諸問題について集中的に読書会でご指導いただいたことが思い出される。先生からは接頭辞 ge- がなぜ完了相の意味を担うようになったのか、アスペクトとモダリティがどのように繋がっているのか、名詞にまで転用されるようになったのはなぜかを明らかにするようにという課題をいただいたままになっているが、本稿をその課題に対する一報告としたい。先生からこれまでに賜った御

恩に改めて感謝申し上げますとともに、心からご冥福をお祈り申し上げます。

- 1) 本稿では、用例の出典をこのように作品名の略号と連数・行数によって示すこととする。ここでは、„Nibelungenlied“ の 229 連、第 2 行を表している。なお、それぞれの作品の文献情報については、[使用テキスト] 欄を参照いただきたい。
- 2) Diwald (2009: 115) で引用されているのは 29-30 行であるが、文意を理解しやすくするためにここでは括弧の中に 28 行目を追加している。
- 3) 以下では „mugen/kunnen“ と組み合わされた文意に限界点が含まれているものを完了アスペクト (Perfektiv)、限界点を含まないものを未完了アスペクト (Imperfektiv) と区別する。なお、ge-Inf. 形で現れる完了アスペクトの動詞は次の 45 語であり、未完了アスペクトで現れる動詞は 3 語である。なお、この中にはもはや単純形では用いられない genesen, geniezen, geschehen も含まれているため、これらの用例は除外している。

(Perfektiv)

gebrieven, gedienen, gefüegen, gefüeren, gefrîden, gegeben, gehelfen, geherbergen, gehüeten, geheizen, gejechen, gelâzen, gelegen, geleiten, gelusten, genâden, genennen, genesen, geniezen, gepflegen, gerâten, grîten, geriuwen, gerûmen, geruowen, gesagen, geschaden, geschehen, gescheiden, gesehen, gesigen, gesparn, gestân, gestrîten, geswîchen, geswîgen, geteilen, getragen, getrœsten, getrûwen, getuon, gevolgen, gewegen, gewerben, gewerren

(Imperfektiv)

gehân (gehaben), geleben, gesîn (gewesen)

- 4) 筆者は湯浅 (2010) において ge-Inf. の機能を「行為の実現」を表す指標と推定したが、その内実はまだ曖昧であった。本稿によって、それを修正して補足したい。
- 5) Heindl (2009) が挙げているのは „er riet sô wîsliche, / daz nieman zuo der stunde / baz gerâten kunde.“ という „Herzog Ernst“ からの例 (624 行) である。ここで問題となるのは kunde + gerâten の意味を「誰もより良い助言をする能力がない (imstande sein)」と理解するのか、「誰もより良い助言をできないだろうと話し手が考えている」と理解するかであるが、文脈から考えてもどちらの解釈も可能である。
- 6) 表 2 の分布から分かるように、否定文なら通常デオンティック・モダリティに分類される Perfektiv が優勢的であるとも、平叙文なら Imperfektiv が優勢的であるとも言える訳ではない。また、「能力」を表す場合とどちらにも解釈可能な場合には割合の違いが大きいのが、これは用例数の少なさによるものとも考えられる。
- 7) この特徴は、„Nibelungenlied“ には ge-Inf. の場合と ge- を伴わない場合の両方で現れていなかったために本稿では触れていないが、例えば ligen / geligen の使い分け方に顕著に現れている。Hartmann von Aue の „Iwein“ に見られる以下の例は、敵に倒されて馬も奪われた Karlogrenant が「いつまでも倒れたままではいけない」と思っている場面である。この例で geligen が用いられているのは、す

でに倒されて横たわっている状況、「結果状態」を表し、「その状況のままではいられない」という Karlogrenant の心的態度を表すためであると考えられる：

Dô mir des orses wart verzigēn, / ichn moht niht imer dâ geligen: / dô geruocht
ich gân von dan / als ein êrlôser man / und saz aber zuo dem brunnen. (Iw. 763-
767)

(Als ich des Pferdes beraubt war / und noch nicht ewig liegenbleiben konnte, /
befand ich es für gut, zu Fuß davon zu gehen, / der Ehre beraubt, / und setzte
mich wieder zu der Quelle.)

[使用テキスト]

Das Nibelungenlied. Nach der Ausgabe von Karl Bartsch, herausgegeben von Helmut de Boor, 22., rev. und von Roswitha Wisniewski erg. Auflage. (Deutsche Klassiker des Mittelalters) Nachdruck: Wiesbaden, 1996. (=NL)

Hartmann von Aue: *Iwein*. Text der siebenten Ausgabe von G.F.Benecke, K.Lachmann und L.Wolff (1968). Übersetzung und Nachwort von Thomas Cramer, 4. überarbeitete Auflage. Berlin/New York, 2001. (=Iw)

Wolfram von Eschenbach: *Parzival*. Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch. Mittelhochdeutscher Text nach der Ausgabe von Karl Lachmann. Übersetzung und Nachwort von Wolfgang Spiewok. 3 Bde. Stuttgart (Reclam), 2016. (=Pz)

[翻訳書]

Das Nibelungenlied. Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch. Nach dem Text von Karl Bartsch und Helmut de Boor, ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von Siegfried Grosse. Stuttgart (Reclam), 2001.

[参考文献]

Behaghel, Otto: *Deutsche Syntax. Eine geschichtliche Darstellung*. Bd.2, Heidelberg, 1924.

Benecke, Georg Friedrich: *Wörterbuch zu Hartmanns Iwein*. 3. Ausgabe. Leipzig, 1901.

Benecke, G.F./Müller, W./Zarncke, F: *Mittelhochdeutsches Wörterbuch*. 5 Bde. Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854-1866. Stuttgart (Hilzel), 1990.

- de Boor, Helmut/Wisniewski, Roswitha: *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 10. durchgesehene Auflage. Sammlung Göschen 2209, Berlin/New York (Gruyter), 1998.
- Diewald, Gabriele: Die Interdependenzen von Kontexttypen bei Grammatikalisierungsprozessen illustriert am Beispiel der deutschen Modalverben. In: *Modalität. Epistemik und Evidentialität bei Modalverb, Adverb, Modalpartikel und Modus*. herausgegeben von W. Abraham und E. Leiss, Tübingen (Stauffenburg), 2009, S.101–122.
- Erdmann, Oskar: *Grundzüge der deutschen Syntax*. 2 Bände in einem Band, Nachdruck der Ausgabe Stuttgart 1886 und 1898, Hildesheim (Olms), 1985.
- Grimm, Jacob: *Deutsche Grammatik 4, 1. Teil*. Jacob Grimm und Wilhelm Grimm Werke. Herausgegeben von Ludwig Erich Schmitt, Abteilung I, Band 13. Hildesheim (Olms-Weidmann), 1989.
- Heindl, Olga: Negation, Modalität und Aspekt im Mittelhochdeutschen im Vergleich zum Slawischen. In: *Modalität. Epistemik und Evidentialität bei Modalverb, Adverb, Modalpartikel und Modus*. herausgegeben von W. Abraham und E. Leiss, Tübingen (Stauffenburg), 2009, S.123–169.
- Hennig, Beate: *Kleines Mittelhochdeutsches Wörterbuch*. 4., verbesserte Auflage. Tübingen, 2001.
- Krahe, H./Meid, W.: Germanische Sprachwissenschaft. Bd. III: Wortbildungslehre. Berlin (Gruyter), Sammlung Göschen Bd. 1218/1218a/1218b, 1967.
- Leiss, Elisabeth: Drei Spielarten der Epistemizität, drei Spielarten der Evidentialität und drei Spielarten des Wissens. In: *Modalität. Epistemik und Evidentialität bei Modalverb, Adverb, Modalpartikel und Modus*. herausgegeben von W. Abraham und E. Leiss, Tübingen (Stauffenburg), 2009, S.3–24.
- Lexer, Matthias: *Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch*. 2. Nachdruck der 3. Auflage von 1885, Stuttgart, 1992.
- Paul, Hermann: *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 25. Auflage. Neu bearbeitet von Thomas Klein, Hans-Joachim Solms und Klaus-Peter Wegera, mit einer Syntax von Ingeborg Schröbler, neubearbeitet und erweitert von Heinz-Peter Prell. Tübingen, 2007.
- Paul, Hermann/Mitzka, Walther: *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 19. Auflage. Tübingen, 1966.
- Reichert, Hermann: *Nibelungenlied-Lehrwerk. Sprachlicher Kommentar, mittelhochdeutsche Grammatik, Wörterbuch, Passend zum Text der St. Galler Fassung („B“)*. Wien (Praesens-Verlag), 2007.
- Streitberg, W. (1891): Perfektive und Imperfektive Actionsart im Germanischen. In: *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur*. XV, S.70–177.

中高ドイツ語における „mugen/kunnen + ge-Infinitiv“ について

相良守峯訳：『ニーベルンゲンの歌』（全2冊）、東京（岩波書店）、1995年。

山田小枝：『モダリティ』、東京（同学社）、1990年。

湯浅博章：中高ドイツ語における動詞カテゴリーの親縁性—動詞接頭辞 ge- の文法的機能について— In:『姫路獨協大学外国語学部紀要』第23号、11-31ページ、姫路獨協大学外国語学部、2010年。

Über das Zusammenwirken von Aspekt und Modalität im Mittelhochdeutschen
— Die grammatische Funktion von „mugen/kunnen + ge-Infinitiv“ —

Hiroaki YUASA

Die vorliegende Arbeit behandelt die Konstruktion im Mittelhochdeutschen, die aus den Präteritopräsentien als Modalverben „*mugen/kunnen*“ und den mit dem Präfix „ge-“ präfigierten Infinitiven besteht, wie in Sätzen „*doch möhte iu daz wunder niemen wol gesagen*,“ (Nibelungenlied 229: 2) oder „*ine mac hie heime niht gesîn*.“ (Nibelungenlied 919: 4). Diesen Verwendungen begegnet man sehr häufig vom Gotischen bis zum Ende des Mittelhochdeutschen, und diese Konstruktion ist schon seit dem 19. Jahrhundert in den Grammatiken oder Forschungen verschiedenartig behandelt worden. Jedoch konnte man bis heute noch nicht völlig deren Funktion erklären. Das Präfix „ge-“ ist (fast) allgemein als das für die „Perfektivierung“ anzuerkennen, aber nur aus dieser Eigenschaft kann man z.B. Fragen nicht beantworten, warum die Präteritopräsentien als Modalverben manchmal die „Perfektivierung“ verlangen und manchmal nicht, oder wozu die Dichter der mittelhochdeutschen Literatur sogar die imperfektiven (durativen) Verben wie „*sîn*“ oder „*hân (haben)*“ mit dem Präfix „ge-“ präfigierten. Diese Fragen berücksichtigend versuche ich in dieser Arbeit, aus der Perspektive des Zusammenwirkens von Modalität und Aspekt die grammatische Funktion von „*mugen/kunnen + ge-Infinitiv*“ deutlicher herauszuarbeiten.

Unter allen Belegen von „mugen/kunnen“ im Nibelungenlied kann

man bei 14 Verben (elf Perfektiven und drei Imperfektiven) sowohl Fälle mit dem Präfix „ge-“ als auch welche ohne „ge-“ finden. Während die „Aktionsarten“ der Verben „unabhängig von der Auffassung des sprechenden Subjekts“ objektiv die Varianten des Handlungsverlaufs darstellen, geht es beim „Aspekt“ um den „Gesichtspunkt, unter dem der Verbalvorgang von seiten des Sprechenden angeschaut wird“ (Paul/Klein/Solms/ Wegera 2007: 305), was normalerweise im „Perfektiv“ mit dem Gedanken an eine Begrenzung und im „Imperfektiv“ ohne solchen Gedanken unterteilt wird. Vom Aspekt in diesem Sinne her gesehen, habe ich die Belegen mit den obigen 14 Verben verglichen. Als Ergebnis des Vergleichs kann man festhalten, dass der Verbalvorgang der perfektiven Sätze bei den Belegen vom „ge-Inf.“ *resultativ* zu betrachten ist, wie in dem Beleg „*Jane mac ich allen liuten die swære niht gesagen*“ (Nibelungenlied 155: 1). Aber bei den Belegen ohne das Präfix begegnet man vielen Fällen, wo man nicht klar entscheiden kann, ob der Sprecher die Handlung *inchoativ* oder *resultativ* betrachtet. So könnte man sagen, dass die „ge-Infinitive“ bei den „*mugen/kunnen*“ als das Kennzeichen des „Resultativs“ benutzt werden.

Was die Modalität anbelangt, ist sie normalerweise in die „epistemische“ und in die „deontische“ unterteilt. Aber heute noch sind die Art und Weise der Teilung und deren Umfänge je nach Forschung unterschiedlich. Für rein „epistemisch“ scheint man zumeist im Mittelhochdeutschen nur die Konstruktion „Modalverben + Infinitiv Perfekt (hân (haben) / sîn + p.p.)“ zu halten. Dann werden die häufig erscheinenden Belege in dem Sinne „es ist möglich, dass“ oder die im Konjunktiv erscheinenden Belege weder als rein „epistemisch“ noch als rein „deontisch“ (im Sinne der „Erlaubnis“) betrachtet. So kann man die hier behandelten Belege nicht von dieser Teilung abhängig betrachten. Deswegen habe ich mit der Einordnung

„Möglichkeit“ / „Fähigkeit“ nach Diewald (2009) und Heindl (2009) die Belege analysiert. Wenn man die Belege ohne das Präfix „ge-“ von den 14 gemeinsamen Verben vergleicht, kann man die Verwendungen im Sinne von „Fähigkeit“ sowie die im Sinne von „Möglichkeit“ in einem ähnlichen Verhältnis finden. Aber wenn man die Belege der gemeinsamen imperfektiven Verben betrachtet, kann man bemerken, dass die Belege mit dem „ge-Inf.“ meistens eine beliebige „Sprechereinstellung“ darstellt, wie in dem Beleg *„sie mohte nâch ir leide daz liep vil wol geleben, / daz ir ouch jâhen êre die Etzelen man“* (Nibelungenlied 1333: 2-3): Sie bedeuten einerseits „Möglichkeit“, andererseits sind bei denen durch die Konjunktive „Vermutung“ oder „Einschätzung“ des Sprechers impliziert. Aus diesem Ergebnis könnte man folgern, dass der Sprecher im Mittelhochdeutschen meistens für den Ausdruck seiner persönlichen Einstellung „ge-Inf.“ verwendet, und dadurch ausführlicher bezeichnet, wie er sich den resultativen „Zustand“ nach dem Erscheinen des aus dem Kontext her gegebenen Sachverhalts vorstellt. In diesem Punkt könnte man die Wirkung und die grammatische Funktion von *„mugen/kunnen + ge-Infinitiven“* erkennen.